

# センター通信 No.100



「センター通信」創刊号



こごく講座2020 聴て、mirain

## 目次 2020年9月

ひと言	齊藤 重美 1
特集1 コロナ禍の夏に生きる、考える	
小さな命から・・・	山形 孝夫 2
COVID-19のパンデミックのなかで思うこと	堀尾 輝久 4
「コロナ問題」のなかで、今、共に考えあいたいこと	
	田中 孝彦 6
コロナ禍で考える教育の本質	川名 直子 8
コロナ禍で思う～「生きる」ということ	横湯 園子 9
コロナ特集に励まされて	佐々木純子 9
特集2 研究センター「つうしん」100号を迎えて	
① 中森孜郎先生に聞く センターの創設とこれからへの期待	中森 孜郎 12
② 研究センターの活動・企画に参加して シャツの背中の中の大きな染み ～研究センターによる私への教育～	
	小森 陽一 14
	佐々木忠夫 15
	平居 高志 16
	藤岡しほり 16
	太田 直道 17
	山岸 利次 18
	大木 一彦 19
	遠藤 利美 19
	早坂百合恵 20
	玉手まなみ 20
	阿部菜知子 21
今、自分の頭で考えること 「流行」よりも「不易」 センターとの出会いが、今の私に 魅れ、「会読」の精神 つながる場であり続けて 視野を広げ、実践を考え直す 学んだ！～戦後教育の歴史と理論～ 平和の追求をこれから “いいとこみっけ” 朝ドラの旦那様のように	
③ 研究センターへの期待 学びを保障する場として 初心を忘るべからず 貧困・格差・ジェンダー問題と教育 200号をめざして 相談センターから見える宮城の教育課題 ますます重要な研究センターの役割 子どもに責任を負う「民間」教育のセンターとして	
	宮澤 孝子 22
	田中 武雄 22
	富樫 昌良 23
	浦 秀隆 24
	寺沢 幹緒 24
	高橋 正行 26
	渡辺 孝之 26
	伊藤 慶 27
	春日 辰夫 27
	菅井 仁 28
	“人”と出会う “知”と出会う 広場として
	高橋 達郎 30
	清岡 修 30
	数見 隆生 31
本気で、本音で、喧々諤々と議論する ひろまる・たかまる・ふかまる さらなる前進・発展を 「人」と出会う “知”と出会う 広場として 「全国学力テスト」をやめさせたい 3つのイメージ これからのセンターの課題と展望	
読書のすすめ (第1回)	春日 辰夫 29
おすすめ映画「名もなき生涯」	長住 康博 32
センターの動き・編集後記	32

## ひと言 そして生きのびよ

齊藤重美 (一般財団法人宮城県教育会館理事)

祝！ センター通信100号。言うまでもなく、研究センターは当法人の重要な事業の一つであり、これまでその運営に携わってこられたすべての方々々に敬意を表したいと思えます。

さて、近頃「河北新報」文化欄に時折「井上ひさし没後10年」と題する記事が掲載されています。「むずかしことをやさしく、(略)…」など、名言を多く残している彼ですが、小森陽一氏の対談集のタイトルにもなっている次の言葉もその一つではないでしょうか。

『記憶せよ、抗議せよ、そして生きのびよ。』

この言葉に関しては、『抗議せよ、そして生きのびよ。』は英国の反核運動家で物理学者の名言。それに私は『記憶せよ』をつけ加えた。という自筆のメモがあり、そこには2000・8・3という日付があります。

存命であれば、『歴代最長』で『歴代最悪』の安倍自公政権に対して、きつと「やさしく」「ふかく」そして「ゆかいな」言葉を発してくれたのではないのでしょうか。この機に改めて彼の言葉たちを胸に刻みたいものです。

# 特集1 コロナ禍の夏に生きる、考える

## 小さな命から・・・

山形孝夫

1

かれこれ10年も前のことである。

その日、仙台は朝から濃い霧におおわれていた。

天気予報は、関東甲信越地方が梅雨入りしたことを伝えていた。

私は、読みかけの新聞を手に、庭先の、ようやく咲き始めた谷うつぎの花を眺めていた。

その時である。白い花の根もとで、黒い何かがうごめいているのを見た。

何だろう。近づいてみると、子供の小指ほどの、小さな小さな蛙ではないか。1匹や2匹ではない。よく見るとおびたらしい小蛙の行列なのだった。数え始めて途中で止めた。

—あゝ、沼から這い上がってきたのだな……。

沼というのは、私の住む団地の雨水をコントロールする遊水池である。以前は、農業用水の〈沼〉であったに違いない。

それにしても、遊水池とわが家との境界には、5〜6メートルの垂直に切り立ったコンクリートの壁がある。そのコンクリートの壁をどのようによじ登って来たのだろう。私は好奇心に引かれ、露に濡れたすすきの草むらをかき分け、水辺に続く土手の斜面を降りて行った。強い沼の匂いがした。次の瞬間、目に飛び込んできた光景は、100とか200と言った、そんな生易しい数ではない。千か万単位のおびたらしい数の小蛙の行列であった。それが水辺から陸地に這い上がり、コンクリートの壁にとりつき、上へ上へと這い登ってゆく。それは、驚きのドラマであった。宇宙が繰り広げる荘厳な儀式に、突然立ち会わされたという感覚がした。

その夜、水戸に住む年若い友人に電話して、その不思議を訊ねた。生物学を専攻する友人は、即座に「間違はなくヒキガエルの誕生です」と言った。オタマジャクシから変態し、一斉に水辺を離れるのだという。

—離れて、どこにいくのです？

—林の中でしょう。深い草むら、やぶの中、要するに餌のミミズやカタツムリや虫たちのたくさん棲むところ……。

その行列が、時には1キ口とか2キ口にもわたるといふ。それだけではない。2、3年後には、こんどは産卵のために恋人といっしょに生まれ故郷の水辺に戻ってくる。その長い遠い旅の途中で、おおくの力エルが命を落とす……。

その夜、眠れぬままに、雨の音を聞いていた。ふと思い出して、若い頃、手にした1冊の詩集を取り出した。故郷に帰る「山村ゲリラ」の詩であった。

もう何日も歩きつづけた 背中に銃を背負い  
道は曲がりくねって 見知らぬ村から村へ続いている  
だがその向こうになじみふかいひとつの村がある  
そこに帰る 帰らねばならぬ  
目を閉じると一瞬のうちに思い出す  
森の形 畑を通る抜け路 屋根飾り……

—中略—

野垂れ死にした父祖たちよ 追い立てられた母達よ  
そこに帰る 見覚えのある坂道を通り  
銃をかまえて曲がり角から躍りだす  
いま始源の遺恨をはらす  
復讐の季だ その村は向こうにある

(黒田喜夫「不安と遊撃」昭和34年第10回H氏賞)

詩人は、山形県出身の、戦後の左翼系の詩人であった。記憶を辿ると、私が、大学院の終わりの27、28歳のころの話。60年安保闘争の真只中である。全学連の国会突入で、東大生の樺美智子が踏み殺された。若者たちは傷つき、挫折し、闘争は分解した。

そのとき以来である。銃を背中に、故郷の山村へ帰ってゆく黒田の詩が、若者の傷ついた心にそのまま残った。知られるように、山村革命は、夢のまた夢、空想のままに挫折し、山村に向かうゲリラは超現実の空想の中に消滅していった。

それから以後の日本は、列島改造の嵐にまきこまれ、目まぐるしい高度経済成長の波に巻き込まれてゆく。若者たちは夢中になって働き、金儲けに狂奔した。日本人もきつとなれる、アメリカ式の「金持ち父さん」になれる……。

まるで、その先には新生日本の幸福がある……でもどうかのよう……。悪いことに、「モノ」の豊かさが「心」の破壊に拍車をかけた。そして不幸は、一挙にきた。

幸福とは何か。それはどこにあるのか。失われた歳月は、もしかするとコロナ禍という新種の詐欺師のような疫病の時代の前触れだったのではなかったのか。

そうであるなら、もう嘆くことは止めにして、いつそのこと深い井戸を掘り抜くように、悲しみの井戸をどこまでも掘り進む以外にないのではないか。

思えば、「空想のゲリラ」は不思議な詩であった。背中にさびついた銃を背負って、山村の故郷に帰るゲリラと、小さなカエルの旅する姿が、どこかでひとつにつながったように思われるからである。今年の夏はコロナの夏、とりわけ記録的な暑さであった。こんな猛暑の中を、カエルたちは、どこに身を潜めているのだろう。本当の幸福とは、こうしたカエルたちの命のことを真面目に考えるとこころから始まるのではないか。



# COVID-19の パンデミックのなかで思うこと

堀尾輝久

1

世界中のコロナ禍の情報のなかで、高齢で糖尿病の我が身はもっぱら自粛という名の閉塞の状態だが、頭だけは世界に開かれている。それにしても自粛は萎縮ではなく、社会的距離は孤立であってはならない。自分を守ることが貴方を守ること、自己愛と利他愛はひとつのこと。この良識（真実）を言葉ではなく、身体を通して、理解できた人も多いだろう。しかしオリンピックをやるとだと叫んでいた権力者に、いきなり「検査もしない、補償もない自粛」を説教され、強要されても、それは自粛とはいわないのではないか。監視のなかの自粛は萎縮となり、監視の内面化は他者への眼差しを変え、「自粛警察」として攻撃性と差別感情をうむ。

ところで、コロナ禍の前で人は平等である。確かにそうだ。しかし国により、地方により、年齢により、被害の大きさ、広がり、の速さ、対策の違いは明らかであり、医療体制、社会保障のあり方の違いが目に見えるようになってきた。新自由主義のもと医療・福祉を切り捨て、社会の格差を拡げてきた国では医療崩壊を早め、社会的弱者の感染・死亡率の高さは社会的貧困と連動し、それは人間の尊厳を奪う埋葬のされ方にも現れている。貧困と格差の差別的構造は地球規模であることをコロナは逆照射して可視化させている。手洗いしろといっても水がないのだ。感染爆発は当然の

成り行きなのだ。

他方でしかし、科学と医療に国境なしの信念のもとでの国際的連帯も広がり、人々の意識も、医療従事者や介護従事者への感謝と、自分のために耐えることが、他者を守り、世界に広がるパンデミックと闘うことなのだという、人類意識と連帯の感覚を自覚めさせてもくれた。それは市民の参加と信頼に基づく政府の、科学的専門性と透明性のある、未来世代を配慮しての、政策を求める意識と繋がっている。「女・子ども」は無視し、軍拡は止めず、シヨック・ドクトリンで利益を狙うなど論外である。

2

グテーレス国連事務総長は一斉停戦とWHOと協力して貧困層と難民の救済の国際的支援を呼びかけた。（3月23日、27日）地球時代の人類的連帯を！

トランプ大統領はWHOが中国寄りで、初動の判断を誤ったとして、WHOへの賛助金を引き上げる決定をし、さらにコロナウイルスは中国武漢の疫学研究所から出されたものだと中国批判を強めている。しかし彼こそコロナを甘く見、アメリカは感染者が少ないと言い、安倍首相とオリンピックもできると樂觀的であつた筈。3月以降の状況はニューヨークを中心に、全米に広がり、感染者数と死亡者数は1位となっている。医療保険も無く、病院に行けない貧困層や移民の多いヒスパニックの犠牲者が多いのは、新自由主義の先頭を行く「富める国」アメリカが社会経済的には格差・差別の国であることを示している。コロナと向き合い、懸命に努力しているクオモニューヨーク州知事と、選挙目当てのトランプとの違いぐらいは心あるアメリカ市民には判っていることだろう。アメリカ第一とはコロナ被害のことかの皮肉も聞こえてくる。そうなったのは中国とWHOのセイだと威だけだか。こんななかで民主的社會主義を掲げるサンダース氏の発言が期待され

てもいよう。バイデン候補はどこまでその声を受け止めることができるのか。警察官による黒人ジョージ・フロイドさんの殺害事件はアメリカ社会の暗部を照らしだし、人種差別への非暴力の抗議運動は帝国主義的植民地支配を問い直す国際的な連帯運動にまで拡がっている。

### 3

グローバルに広がるコロナへの向き合い方に違いがあり、ヨーロッパではドイツが、アジアでは韓国が成功例として注目されている。国民の信頼に支えられた政府の、科学的知見に基づく決断の速さと透明性に、検査と自粛と補償の一体性に共通点がある。余り報道されていないが、軍隊を持たず、教育と医療に力を注いできたコストリカのコロナ対応は注目されてよい。スウェーデンとベトナムの取り組みについても詳しく知りたい。中国と台湾についても。コロナ対策の違いには民主主義とはなにかが、そしてそのありようが問われている。医療崩壊のなかでは否応なく命の選別も行わざるをえなかった。医師達の苦悩。家族の苦悩。本人の苦悩。人間と自然の関係、命と死への向き合い方が問われている。



民主教育研究所と共催した第17回全国教育研究交流集会（2009年）

日本のPCR検査体制の遅れ、やるべきことをやらず、自粛と自己責任の押しつけ、他方で各地の水害とコロナの恐怖をよそにGOTOキャンペーンの強行。政治の破綻は目に見えている。これは人災だという民の声こそ天の声。

### 4

長期の緊急事態と自粛は生命と生活のあり方と、人は関係のなかで生きるこの意味を問い直している。イギリスのジョンソン首相は自分も被患し、あらためて前首相サッチャーが否定した「社会」を発見したという。国家と個人ではなく社会があることを。新自由主義と自己責任論が問い直されている。

人と人との繋がりの中には子どもがいる。青年もいる。老人もいる。障害者もいる。これまで見えなかった、見ようとしなかった、社会を支える人たちがいる。命を守るために自粛し社会的な距離をとると言っても、そのことによって命を失う、生きている意味を失う人もいる。オンラインでは仕事のできない人も多い。

とりわけ発達の可能態としての子どもにとつての「現在」は自分の未来と社会の希望と繋がっている。あそびの場を奪われ、学びの場が閉じられたことは、現在の苦痛と未来の不安として、その欠損は二重化される。孤立化を強いる自粛は「社会」を失うことに通じている。逆に40人を超える学級が過密社会であることを、20人学級こそ学びの環境としてふさわしいことをコロナ禍は教えている。学校は変わらなければならない。2月27日の安倍首相の独断の学校休校の要請が、なんの法的根拠もなく、子どもの権利の視点もなく決められ、学校現場が大混乱し、学校が子どもにない空虚な建物になってしまったことは教師も親も教育委員会も忘れてはならない。卒業式も入学式も無かったことを子どもたちは忘れない。学校が再開されれば今度は学習の遅ればかりを気にする大人たちのことも。

子どもたちの被害は世界に拡がっている。国連子どもの権利委員会は各国に対して子どもたちの権利の視点の重要性を訴える声明を出している。教育の過度なIT化への警告も含まれている。

子どもたちはいまその体験を通して、学びを深めるチャンスでもある。生活を通しての学び、総合的な学び。そのためには大人がそのことに気づき、自ら学び、親が、教師がその学びを励ますことが大事なのである。コロナから学ぶことは大きい！ コロナ日記を付けて、交換し語り合うのもよい。生活学習の中心にコロナを据えれば、命と身体・健康への気づき、友達関係の気づきから、社会への気づき、さらに疫病と人類の闘いと共生の歴史、そして地球上のひとびとへと共感と連帯の意識は広がる。社会の貧困や格差が、地球規模で拡がっていることも見えてこよう。一人ひとりの尊厳を軸に、主権者の自覚と政治への関心も育ち、新しい未来も見えてこよう。親達の共感と支えのなかで、教師の教育実践のちから、子どもたちの関心のある問題を引きだし、繋ぐちからが問われてくる。「三密」ではなく、「距離とる」なかでの、新たな「絆」が求められている。

東日本大震災で培われた皆さまの知恵と底力に期待します。

※本稿は『法と民主主義』2020・5号のエッセーに大幅に加筆し、

みやぎ教育文化研究センターの会誌に送ったものです。7・14

(東京大学名誉教授)



## 「コロナ問題」のなかで、

### 今、共に考えあいたいこと

田中孝彦

「こ半年余りの暮らしから」

「コロナ問題」の深刻化・長期化のなかで、2月末頃から、予定されていたほとんどの研究会・学習会・講演会などが、延期・中止になった。3月に入って、直接関わっている学会・研究会などの学習・研究活動の計画の組み換えも、行われた。4月以降、ズームによる会議・研究会が増え、自宅で過ごす時間が増えた。また、同居している子どもの主たる仕事場が自宅になり、孫の保育園の迎えも生活の一部となった。そして、そうした日々の暮らしに、「感染していないか」「感染させていないか」という「心配」が、常につきまとうようになった。

そのなかで、私は、「敗戦」後の幼年期の生活の記憶、1950年代前半からの「戦後改革」の雰囲気を残した小学校生活の体験、1960年代後半からの「高度経済成長」の矛盾の噴出と「大学問題」の経験、阪神大震災（1995年）・東日本大震災など（2011年）の経験などのなかで感じ考えたことを、次々と想い起していた。同時に、私は、それらとはまた異なる質の、自分自身の体調に関する心配・不安と、日常生活を共にしている妻・子ども・孫たちの心配・不安との重なるなかで、半年を過ごしてきた。

その過程で、事態への対応の基本を、「いのちを守ること」と「経済を動かすこと」との同時追求と簡単に言ってしまう論調、また、「ウイズ・コロナの時代」「新しい生活様式へ」といった言葉をすぐに使っ

てしまう論議に、違和を感じてきました。そして、今、私は、次の三つにまとめられるような学習・研究を深めていければと思うようになっていいる。

### ① 日本の「感染症」の歴史、そのなかでの人々と子どもたちの生活と内面、医療・福祉・教育などの専門職の人々の実践と内面の歴史をふりかえる

先日、私は、NHK・BSで放映された「英雄たちの選択―百年前のパンデミック『スペイン風邪』との闘い」を観た。そして、そのなかで紹介された、当時の一人の思春期の女性の「不安」や感情の「揺れ」を記した日記や、地域の人々や家族の生命をまもろうとして苦闘した、ある医師の診察・治療の「試み」と内面の「葛藤」の記録が、とくに印象に残った。

今、私は、「コロナ感染」の深刻化・長期化の状況のなかで、感染者・重症者・死者の数の増減に関心を向けることはもちろんだが、それだけでなく、人々と子どもたちの生活と内面の「不安」についての理解を深め、医療・福祉・心理臨床・教育などの専門職の条件について考えを深めあうような、「歴史的」かつ「臨床的」とでもいふべき学習・研究の重要性を、改めて考えさせられている。

### ② 人々と子どもたちの「生存」を支える地球規模での共同を、地域から追求する

また、この間、私は、歴史学者・哲学者のユヴァル・ノア・ハラリのこの間のいくつかの発言を思い起した。とくに2020年3月15日のTIME誌の記事「人類はコロナウイルスといかに闘うべきか——今こそグローバルな信頼と団結を」のなかで、彼は次のような趣旨のことを述べていた。

「現在のアメリカの政権は、世界保健機関のような国際機関への支援を削減した。……そして、新型コロナウイルス危機が勃発したと

きには傍観を決め込み、これまでのところ指導的役割を引き受けることを控えている。たとえ最終的にリーダーシップを担おうとしても、現在のアメリカの政権に対する信頼がはなはだしく損なわれてしまっているため、進んで追従する国はほとんどないだろう。……だが、あらゆる危機は好機でもある。目下の大流行が、グローバルな不和によってもたらされた深刻な危機に人類が気づく助けとなることを願いたい。……もしこの感染症の大流行が人間の間の不和と不信を募らせるなら、それはこのウイルスにとつて最大の勝利となるだろう。……対照的に、もしこの大流行からより緊密な国際協力が生じれば、それは新型コロナウイルスに対する勝利だけではなく、将来現れるあらゆる病原体に対する勝利ともなることだろう。」

ハラリが言うように、私は、今、コロナ感染の深刻化と長期化の状況の中で、「新自由主義」的な「敵対」の動きに対して、人々と子どもたちの「生命」「生存」を支えあう地球規模での共同とその条件を、私たちが生きている地域から、実践的にも研究的にも追求することが重要になっていいるように、強く感じている。

### ③ 子ども・若者たちの不安と生存・成長・学習の要求を、彼らと共に考える

さらに、私は、この一月ほどの間、日本子どもを守る会編集の『子ども白書』（2020年版、かもがわ出版）の緊急特集「コロナ子



震災についての聴き取り調査（高校生たちから）2013年

どもクライシス」の部分を、繰り返し読んでいた。

そこには、子ども・若者たち自身の生の声や、彼らと共に暮らす親たちや教師・援助職の人たちの声を紹介した、次のような文章が集められていた。「ひとり親の困窮―コロナによる影響の深さ」（赤石千枝子）、「休校と子どもたちの生活―おとなのつながりを今」（西郷南海子）、「ローカルネットワークが拓いた子どもの居場所」（桜井龍太郎）、「経済的に困窮する学生たち―5人に1人が退学検討」（木村和貴）、「子どもと教員の危機に打ち克つために―共同して『ブラック職場』の―掃を」（勝野正章）……。

それらを読みながら、今、おとなが、暮らしの中で、子ども・若者たちの不安と生存・成長・学習の要求を、彼らと共に考えることの重要さを改めて強く感じている。例えば、今、「新型コロナウイルス」に対するワクチンの開発の現状・到達・問題をめぐる社会的・国際的論議が起こっているが、これは、子ども・若者たちと私たちとが考える必要のある問題の一つであり、それにふさわしい学習を保障する教育実践を創り出すことが課題であろう。

### 「研究センター」との共同思考を深めたい

なお、私は、東日本大震災が起きた直後から、日本臨床教育学会の「震災調査チーム」の一員として、「みやぎ教育文化研究センター」との共同調査に取り組んできた。それは、大震災を経験した子ども・若者、住民、援助職・教育職の人々からの聴きとりを中心とする調査であるが、今、そのまとめの作業に入ったところである。

この文章の最初の部分で少しふれたが、「新型コロナ感染」がもたらしている問題と、「大震災」がもたらした問題との間には、当然、性格の違いがある。しかし、その二つの大きなできごとを差異と連関において考える共同思考・共同研究を、「センター」のみなさんとともに深めていければと思っている。

（日本臨床教育学会会長）

## コロナ禍で考える

### 教育の本質

川名直子

今回の新型コロナウイルスによる学校現場での混乱の中で、改めて教育の在り方をいろいろと考えさせられています。

あまりにも短い夏休みの状況に、授業時数の縛りがそんなに大切なものだろうかという疑問はぬぐえません。カリキュラムの根本から間違っているのではないのでしょうか？

そして、教員は朝早く出勤して子どもたちの検温をしたり、子どもが下校した後は教室や校舎内の消毒作業に追われたりしています。そういった仕事まで、教員がしなければならぬのでしょうか？働き方改革は頓挫してしまっていると言えます。

校舎のつくりはどうでしょうか？ 大規模校では、休み時間をずらさないとトイレや手洗い場が密状態になるために、休み時間をずらすようなことも行わなければなりません。手洗いの効果が大きいことが分かっていますが、今のうちはいいですが、真冬に十分な手洗いというのは無理な話だと、養護教員の方々は憂慮しています。考えてみれば、同じ教室内で授業も給食も行っている日本の学校のつくり自体、問題満載なのではないでしょうか？

今、日本の教育の在り方の根本から見直していかないと、今後新たな新型コロナウイルスが出現するたびに

# コロナ禍で思う「生きる」ということ

横 湯 園 子

## はじめに

2003年、新型コロナウイルスによるSARS（重症急性呼吸器症候群）の出現は世界を震撼させたが、日本人の患者数はゼロでした。

ところが、2019年末に別の新型コロナウイルスが中国に発生し、世界保健機関は「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」であると宣言しました。

この時点では、このウイルスの性質、感染の病理学、疫学の詳細はわかっておらず、治療薬もありません。当面の対策としては、各人がウイルスの伝播を妨げる行動をとるしかない、とのことでした。

それを知った私はショックでした。なぜなら、私は後期高齢者であるだけでなく、狭心症だったからです。

## 1 死なない、生き残るためには「やれることはしていこう」の思い

まず思ったのは、40年近く職にあった人間として、私は公的年金を受け取っている身であり、望まなければ外出する必要のない身であるということ。狭心症の持病などで二つの病院に通院中であり、いざという時は緊急に入院できる病院があり、主治医がいるなど、恵まれているのではないかと思います。

そして、主治医の指示に従いつつも、心理臨床家として「やれることはやっぴいこう」と心を決めたのです。

## 2 新型コロナウイルス感染者を多くだしている地域に住む私です

ご存知のように、東京都内は毎日、300人前後の新規感染者が出ていること。

右往左往するのは明らかです。ようやく政府も少人数学級について言及せざるを得なくなったのは、大きな収穫と言えます。これに乗じて、カリキュラムや校舎のつくりなども、総合的に日本の教育そのものを新しい視点で作直していくというのはどうでしょうか。研究センターには、ぜひそう言った視点で、思い切った教育の原点の提言を發出していただきたいと思います。全国の教育センターと連携し、すでに改革を行っている実例などを収集し、それを現場に発信していく。大きなプランだけでなく小さなプランもどんどん發出していただきたいと思います。

（宮教組・前委員長

## コロナ特集に励まされて

佐々木 純 子

センターつうしん100号、おめでとうござい  
ます。

私は、No.99のコロナ特集に励まされました。「ぞつ、  
そうだよね。」と思い、書いてくださった皆さんに  
感謝しています。

3月～5月、休校を受け入れられないまま時が  
過ぎました。震災の時も今回も自分は何もできな  
かったという思いがあります。6月からようやく学  
校が始まり、子どもたちと過ごす毎日が楽しいです。  
子どもは日々新しいことに出会い、難しいことに挑  
戦し、精一杯学んでいます。友達と教え合い、驚い

しかも感染震源地に比較的近い地域に住んでいる私ですので、4月末から感染を恐れて、外出はしていません。

もともと、会議、研究会、カウンセリング、通院、書店、郵便局に行く程度しか外出していない私ではあるのですが、外出できない閉塞感はずく、孤独でもあり、次第に、精神的に参っていきましました。

その上、私は精神的、身体的には脚力が衰えないようにと思い、悩んでいました。そこで、考えたのが、脚力を保たせ、感染を防ぐために、早朝4時30分頃起床、近所の公園を3周〜4周しようと思いつきました。

この頃の早朝4時30分頃はまだ薄暗いです。でもマスクをし、万歩計をもって公園に。さすがに、誰もいません。5時半近くなると、老人男性がトレランニングを。そのうち、犬を連れ来た人たちも現れます。みなさん、マスクをしています。その頃に家に戻ることにしています。

### 3 では、日中は？

不規則的に入ってくる電話での相談や手紙は別として、テレビを見る習慣のない私は、推理小説を読んでいることが多いです。私はアガサ・クリステイが大好きで、彼女の小説を繰り返し読んでいます。

もちろん、モーリス・ルブランのルパンも好きな男性です。グレーム・グリーン物も大好きで、その日の気分でアガサ・クリステイだったり、モーリス・ルブランだったり、グレーム・グリーンだったり、です。昔は松本清張なども読んでいました。が、いつの間にかアガサ・クリステイになっていました。

この間というと、私は長女とそのパートナーとの同居ですので、独り生活とはちがいますが、緊張しての外出であり通院です。

7月でしたが、娘のパートナーの実家のある長野に行き、温泉付きの国民宿舎に二泊三日してきました。遠くに山々が、近くには千曲川が流れていて、源泉につかりながら、個室では読書と原稿書き。地元のお料理も美味しく、至高の時間を過ごしました。

静岡生まれの私は近くにアルプスにつながる山々を、遠くに富士山を見ながら育ちました。信州行は故郷を重ねながらの、心癒される旅でした。

たり、困ったり、恥ずかしがったりしながら、たくさん喜びを共有しています。一緒に遊び、汗をかいています。自然や命の不思議、弱さや強さを子どもたちと見つけ、感じていきたいです。人間もウイルスも自然、悪者ではないと思います。センタールは、これからも「人間を育てる」「平和・共存」を考えるいろいろな人の声を届けてもらいたいです。自分を見失いそうになったとき元気づけてほしいです。

十数年前に林光さんの高校生公開授業に息子、娘と参加しました。「裸の島」のピアノや高校生の真剣な姿に感動したことが思い出されます。

林光さんの次の詩に、私は勇気づけられています。

がっこう

林光・詩曲

みずはながれつきつきさつて  
にどともどらな  
でもかわはきょうもあしたも  
ここに

みどりのはっぱはじめんにおちて  
やがてきえてゆく

でも木はここにしっかりと  
たっている

わたしたちはどこからかやってきて  
ここに

わたしたちはやがてここから

ところで、新型コロナ感染に怯えながらの東京から、仙台の皆さんを思い出しながら書いていますと、深山が続く東北の、緑豊かな仙台の街も浮かび上がってきます。懐かしいです。

もちろん、東北も信州もコロナ感染症者はゼロではありませんが、封じ込めることは東京と比べて可能だと思います。

東京の都心に住んでいる私は、東北や信州に憧れつつ、東京が一日でも早く、安心できる地になるように願い、祈ってる日々です。

そのためにも、専門家が提起している「感染震源地対策」を求め、「徹底・迅速で歯止め」を願っています。

#### 4 カウンセリングや相談活動

外出できないということは、カウンセリングや相談活動も充分にできないということの意味します。

3月、4月頃と比べて、メールや電話、手紙等での相談がはいつてくるようになりました。

ところで、私はこの秋に81歳になります。

勤務機関も正式な相談場所もない私です。どのように私の自宅の電話番号などを知ったのか知りませんが、すべて、電話と手紙での相談です。

様々な形ではあるが学校がはじまったと思つたら、いじめ、ひきこもり相談だけでなく、多種多様な相談も多くなりました。

教育現場における相談とはいえ、本稿においてさえも、書くことのできない相談もあり、「顔と顔で」、「心と心で」話ができたならと思ひ、願う相談が増えてきたように思います。

家庭内暴力（夫婦間も含む）など、やはり深刻です。緊急時の対応、逃げ込む場の保障、体制の必要を、平時より実感している次第です。

（元中央大学教授・心理臨床家）



林光さんによる高校生公開授業（2010年）

でてゆくだろう  
そのときはべつのわたしたちが  
ここにいて  
やっぱりあそびやっぱりまなんで  
いるだろう

たくさんわたしたちをみまもって  
たくさんわたしたちをみおくと  
がつこうはここに  
わたしたちのがつこう  
いつまでもわたしたちのともだち

（大崎市・高倉少）

# 特集2 研究センター「つうしん」100号を迎えて

## 1 中森孜郎先生に聞く

### センターの創設と

### これからへの期待

本センターは1994年創立ですから今年で27年目、四半世紀経ちました。中森先生は設立から2017年3月まで23年間センターの代表を務められ、その間所長も長く兼務されてきました。設立当初の思いやお考えをまず聞かせてください。

それまでの民間の教育研究所は、日教組の国民教育研究所をはじめ各都道府県に同様の研究所がつけられてきていました。ところが宮城県には、そういう研究所がなかったのです。当時県教組委員長だった高橋浩太郎さんから、私が中心になって進めてほしいという話があり、準備委員会をつくって検討したのです。

その時に考えたのは、これまでの研究所とは違うものにしたということでした。それまでの他県のもは学校教員中心の研究所でしたが、教育という問題は、学校の先生だけでなく親を含めいろんな人が関係しているのだから、県民の誰もが参加できる開かれた組織にしたいと考えたことでした。また日本国憲法と教育基本法、それからちようどその年に子どもの権利条約が日本で批准されたので、この3つを理念にきちんと位置づけてやっていこうと考え



たのです。本当の教育の再生を目指していくこと、それが、21世紀を生きる子どもの教育にとつて最も大事で、そんな研究所にしたいと思つたのです。当然そこでは環境問題とか、平和問題、民族問題、エネルギー問題等々、もうすでに直面している問題だったので、そういう時代を生きていく主権者を育てていく、そういう教育の再生こそ必要だということとを皆で話し合いました。

しかも民間の研究というのは自由で、誰にでも開かれたものにしていくことが大事という、そういう原則で出発したわけです。だから当初は、センターの組織は会員制にし、個人でも団体でも参加できるようにして、年会費を徴収し、運営していくことにしました。団体会員として組合からも負担してもらいましたが、一般市民を含むかなりの個人の会費により運営する自主自立の研究所という面が強かったように思います。ただ震災後に、教育会館の公益事業部門を担う一部門になってからは教育会館経費で運用することになったため会費は徴収していません。

設立から数年間での具体的取り組みで、こういう活動をした、という特徴的なこと、今も思い出すことはどのようなことでしょうか。

先に行ったように、設立当初は21世紀直前の時期で、教育再生という機運があり、教育改革や授業改革の講演会を毎年行いました。設立総会では大田堯先生に「これからの子育て・教育に問われていること」を話してもらい、その後、佐藤学・田中孝彦・堀尾輝久・藤田英典・久富善之・中西新太郎といった教育学者を次々呼び、教育の問い直しの活動を活発に行いました。また、スウェーデンの教育やドイツの教育など海外の教育状況に造詣のある人の話を聞く会なども持ち、実際に夏休み等にセンター主催の海外研修旅行を企画して実行しました。コルチャック先生ゆかりの地とアウシユビッツを訪ねるポーランドの旅やイタリヤ・ドイツ・中国・韓国・ベトナム等々、戦争と平和を考える旅などを毎年のように行い、外国の史実からも学びました。

さらに、センターの研究的な取り組みでは、「近現代史の授業プラン（学習資料）」を作成し、実践を広げようとしたのですが、そのプランによる授業が偏向していると産経新聞が取り上げ、教育委員会がらみの問題になったりもしました。その後、高校生の自主参加による公開授業（それを通じて教材文化と授業の質を問い直す企画）を、その道の専門家を講師に招いて実施することも行うようになりました。小森陽一さんの国語、林光さんの音楽、三上満さんの宮沢賢治、樋口陽一さんの憲法など、多様な専門家に多様な教材文化の授業をしてもらいまし

また、先の市民の誰にも開かれたセンター運営と  
言うことでは、お母さんたちや市民の学習の場とし  
て私がルソーの『エミール』の定例読書会を、宮城  
教育大学の太田直道さんに一般市民向けの哲学講座  
を定例で開いてもらったりもしました。

センターでは様々な企画をし、その時代の教育  
状況を少しでも改善したいと考え活動されてきた  
のですが、日本の教育状況は、人間を育てる教育  
から逆行し、「学力」とか「人材」育成の場に画一  
化されてきています。この最近の状況をどう思わ  
れていますか

安倍政権によって2006年に教育基本法が変  
えられてしまったこと、これが決定的な問題ですね。



(2020年8月3日インタビュー)

変えられる前は、「教育は、不当な支配に服するこ  
となく、国民全体に対し直接に責任を負って行われ  
るべきもの」「教育行政は、その自覚のもとに、教  
育の目的を遂行するに必要な諸条件の整備確立を目  
標として行われなければならない」としていました。  
教育の内容や方法に立ち入ってはならなかった法が  
変えられ、大きく介入されるようになったのです。  
多くの一般市民はもちろん教員の多くもこの問題の  
重大性に気づかなかつたように思います。

そのこと関わって、安倍内閣になり、学力テス  
ト体制が復活し、教育行政が教育内容だけでなく方  
法まで、上から画一化・スタンダード化を推し進め、  
現場教師の自主的な教育実践を行うことの極めて困  
難な状況をもたらしてきました。

こうした教育の反動化の状況を踏まえてセン  
ターの活動を展開してきたのですが、政治がらみの  
こうした問題状況をどう復元していくのかは、大変  
やっかいで大きな課題です。今年になって突然世界  
中に広がり混乱を巻き起こしている新型コロナの状  
況は、再度、学校と教育のあり方を問い直し、変革  
を迫るチャンスでもあるという気がしています。ク  
ラスの人数をもっと少なくし、教員を増やして教育  
活動や授業再生の条件整備に繋がりたいですね。逆  
に、オンライン的な活動が増え、対面の活動や授業  
が減っていく危険性もあるので警戒もしなければな  
りません。

最後に、常に教育実践の創造活動を基本に発想  
されてきた中森先生の立場から研究センターをさ  
らに発展させて行くには何が大事か、お聞かせく  
ださい。

教育というのは一日一日あるいは一時間一時間  
子どもと教師が創っていくわけですよ。毎日毎日  
一つ一つ活動をつみ重ねていく、それしかないわけ

です。そういう日々を教師がどのくらい創ってい  
るか、それができれば教師としてのやりがいや生き  
がいを感じるし、子どもは生き生きしてきて、学校  
は変わっていくわけです。そういう創造的な教育実  
践を子どもと一緒に生み出せるかどうか、今学校  
や教師に問われています。私は80年代から90年代に  
白川小学校や青葉女子学園でそういう実践創造活動  
に関わりましたが、そういう遺産をセンターではぜ  
ひ引き継ぎ、創造の支援をし、広げていってほしい  
と思っています。

とにかく、子どもにとって行くのが楽しいとい  
う学校にしないとだめです。遠山啓さんもかつて言っ  
ていたけれど、楽しくなければ学校ではないのです。  
子どもにとって、いろんなつらいこともあるけど、  
学校は楽しい。教師にとっても多々苦しいことはあ  
るけれど、子どもの人間的な成長と関わることが  
楽しい、だからからやめられない、という実感が必  
要なのです。

だが、最近の学校における子どもや教員の状況か  
ら聞こえてくる声は、「学校が楽しくない、行きた  
くない」と訴える子、「つらいだけでやりがいが見  
いだせない」という教師、が増幅しているらしいと  
いうことです。そのことがコロナ禍で一層広がって  
いるように感じます。

とにかく、「子どもも教師も学校に行くのが楽し  
い」という状況をつくるのが基本で、それには一  
体どうすればいいかを若い教師も年配の教師も、親  
たちもみんな一緒になって話し合える、そういう場  
や組織がどうしても必要です。今後、本センターが  
その一翼を担える機関として発展し、学校現場の抱  
える課題を支援する実質的なセンターとしての活動  
を一層充実させていってほしいと思っています。

(取材者はセンター代表の数見隆生と所長の高橋達郎)

## 2 研究センターの活動・企画に参加して

### シャツの背中への大きな染み

研究センターによる私への教育

小森陽一

私が初めてみやぎ教育文化研究センターから講演依頼を受けて行ったのが、2004年1月の「21世紀に読み直す夏目漱石」でした。この時、小泉純一郎政権のもとで、日本の「自衛隊」が初めて、「復興支援」という名の下に戦場であるイラクに「派遣」されて行きま

した。前年の3月20日、アメリカとイギリスは、イラクが「大量破壊兵器を保持している」ことを口実に、国連憲章で禁じられている先



川前小での授業（2009年）

制攻撃を、「集団的自衛権の先制的行使」という名目で、イラクへの空爆を行ったのです。日本の小泉政権は、「武力攻撃が予測される」ときも自衛隊の海外派遣が可能になる、という戦争法としての「武力攻撃事態法」を、この3ヶ月後の6月に反対する市民、包囲された国会で強行採決して

いきました。

発端は2001年の「9・11」事件で、この首謀者ウサマ・ビン・ラディンをイラクのフセイン政権が匿っているというのが、ブッシュ米大統領とブレア英首相の言い分でしたが、それらすべてが虚偽だったことが後に明らかになりました。

21世紀は、新しい「テロとの戦争」の時代として始まってしまいました。「戦争の放棄」と「戦力の不保持」を世界に約束した日本国憲法9条が、大きな危機に直面していた年の始まりだったので、私の漱石論は、彼の小説を、帝国主義戦争を批判する文学として読み直すことを訴える方向になりました。

2004年6月10日、井上ひさし、梅原猛、大江健三郎、奥平康弘、小田実、加藤周一、澤地久枝、鶴見俊輔、三木睦子の九氏を「呼びかけ人」とした「九条の会」が結成され、私はその事務局長として、全国で講演会を開催する活動を開始しました。そうした状況の中で、「九条の会」事務局長として、宮城県でも複数の講演を行わせていただきました。多くの方たちは、私のことを憲法学者か政治学者だと思われていたようですが、研究センターの方たちは、常に「国語のセンセイ」として私を扱いつづけてくださいました。

2006年には高校生の公開授業で「宮澤賢治・鳥の北斗七星を読む」という授業をさせていただき、翌年には仙台第一高校で実験授業と生徒たちとの対話をさせていただきました。私は大学院在学中の修業時代、高校の非常勤講師と塾の国語講師として生活を成り立たせて来ましたので、こうした授業をさせていただくことは、20代の自分に無意識のうちに戻ることにもなっていました。

26歳で就職した成城大学は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校のある成城学園の、いわば大学部門でしたので、各学校の国語の先生たちが「成城国文学会」という研究会を組織していました。当時の文系の私立大学は、国立大学を定年退職された方たちの再就職先となり、年配の先生方が殆んどだったので、私のような若僧は少な

かったのです。けれど小・中・高の国語の先生たちには同世代の方たちも多く、それぞれの学校で模擬授業をやらせていただきました。それが懐かしく、『小森陽一、二ホン語に出会う』（大修館書店、2000・4）に、授業実践例のいくつかのテープ起こしを掲載しました。

それを読んでいただいたのかどうか、2009年には仙台の川前小学校で授業をさせていただきました。このときは教室を歩きまわりながら、生徒たちとやり取りする授業風景を、センターの方が映像に収録していただけていました。私自身は気づいていませんでしたが、必死で授業をして大量の汗をかいたため（私ほかなりの汗かきです）、シャツの背中に大きなシミができていたそうです。後々まで飲み会の笑い話にされ続けています。

今年の秋も宮城の高校生を相手にした授業を行います。

（東京大学名誉教授

## 今、自分の頭で考えること

佐々木 忠 夫

2014年、絵本「100万回生きたねこ」による国語科英語科コラボレーション授業を行ったが、その公開授業にはみやぎ教育文化研究センターから多くの方が見学に来ていただいた。

また、研究センターでは高校生対象の公開授業を長年開いているが、本校生徒も何度か参加させてもらっている。

どちらも学ぶ楽しさを味わえるものである。それはゲームや遊びの楽しさとは当然違ってている。考える楽しさがそこにはあるのだ。

しかし、現在、その違いをきちんと分けて考えることができなくなっているように思う。たとえば、小学校での英語教育である。本校生徒に聞くと、小学校時代の英語は楽しかったが、中学校に入ってから英語が嫌いになったと言う。小学校では英語を使ってゲームをしたり歌を歌ったりしているだけで、それはまさしく遊びの楽しさである。

さて、コロナ禍の今、思考

停止してしまっていないだろうか。マスコミで話題になった「自粛警察」やマスクをつけていない人に対する異常な反応。

漫才師矢作兼がPCR検査で陽性になり、「陽性なんだけど、新しいケースなんだよ。陽性なんだけど、オレはもう治っているのよ」と語ったとする報道があった。これはどう考えればいいのだろうか。

実は大橋真博士（徳島大学名誉教授）は、PCR検査とは新型コロナウイルスに似たようなウイルスを感知するだけで同じウイルスを検知しているのではないと以前から言っている。したがって、「新しいケース」ではないのだ。

きちんと情報を得て、自分の頭で考えることができれば、自粛警察などの異常な行動をとらなくても済むはずである。

偏った情報と思考停止が日本中を、世界中を席卷しているように思われる。

だからこそ、今自らの頭で考えることが必要である。それをずっとやってきたのが研究センターの高校生公開授業でした。

（小牛田農林高



小牛田農林高での授業（2014年）

## 「流行」よりも「不易」

平居 高志

「センター通信100号」を機に、センターとの思い出を探せば、2007年11月に私が仙台一高で行った、痛恨の「後悔授業」という忌まわしい記憶がまずよみがえる。東大・小森先生との授業対決と銘打った大イベントだったが、日頃でもここまでひどい授業はなかなかないな、と思うほどの大失敗になってしまった。

しかし、私は、合評会でもケロリとしていた。私は当時のセンター長・春日先生から、教員の学び合いの方法として、生の授業を見ることは基本であり大切なのだが、とにかく授業を見せてくれる人がいない、というセンター運営上の悩みをよく聞かされていたからだ。私は、人の授業を見て批判しながら自分の授業は公開しないという人よりも、拙い授業でも公開する自分の方が絶対に偉いと思っていた。

しばらく経った頃、春日先生から「一高の校長があれを許可してくれたおかげで、他の学校でもやりやすくなったやあ」と言われた。その後、センターが「主催」して同様の授業公開イベントを行ったという話は聞かないが、学校主催の授業公開として、同様のイベントが何度か行われた。時には小森先生ご登場でだ。もしかすると、そこが春日先生の「やりやすくなった」の中身なのかも知れない。よかった。さて、「コロナ禍に思う」が与えられたテーマだ。ただ、私の問題意識は、最近ますます「流行」から「不易」へとシフトしている。「流行」に振り回される人の姿ばかり目につくことへの反動だ。一つ大きなことが起これば、そのことしか考えられない。東日本大震災もそう、コロナもそう。今やコロナは、近視眼的な対策の弊害の方が明らかに大きい。今の問題に適切に対処することは大切だ。だが、その能力も「不易」の上にはか成り立たない。教員が「不易」が何かをきちんと考えられるように、「不易」を当たり前のこととして実践できるように、センターには今後もそんなサポートを続けてほしい。

(塩釜高)

## センターとの 出会いが、今の私に

藤岡 しほり

私は高校生の時、センター主催の高校生公開授業や講演会に参加してきました。その中で安田菜津紀さんの講演会に参加し、そこで知ったオリンピック主催の3・11被災地を巡るスタディツアーに参加することができました。そのツアーが、今の私を形成することとなるなんて、その頃は思いませんでした。

私は宮城県で生まれ育ち、東日本大震災を経験しました。しかし、当時、私の住んでいたところはライフラインが1週間ほど途切れたものの、命に関わるほどの被害は受けませんでした。本当に生きていることに感謝したいと思います。ツアーには、被害が大きい地域の現状を知りたいという思いで参加しました。実際には、被災地の今を写真に収め、被災者の方にお話を聞き、それを持ち帰って伝えるというところを行いました。レンズの奥には、鉄骨が剥き出しになった校舎、幼い年齢と名前が刻まれた石碑、更地となった誰かのふるさと、そんな光景でした。しかし、陸前高田のお祭りに参加した際、そこにはたくさんの方の笑顔がありました。ツアーについて報告をする際、一緒に巡った仲間が、3日間で印象的なことは「笑顔」だと言っていました。昨日まで笑っ

## 甦れ、「会読」の精神 太田直道

「センター通信」が100号を迎えた。一つの道標にまでやってきたわけだ。その歩みも淡々としたものに見えるが、中身は薄いものではなかったと信じる。教育の世界を見回してもこのような刊行物は他にあまり見られないのではないかと。周りに広がる波紋もあるいは重なり合い、あるいははるか遠くまで届いているかもしれない。そして確かな痕跡を残してきたと思う。宮城の民間教育運動の灯台のような役割を果たしてきたと言おう。

あまり知られていない言葉だが、江戸時代に「会読」という読書スタイルがあった。多くは藩校を母体としたものであったが、「会読」は自発的な結社として生まれたものが多い。「会読」とは、参加者が車座になって輪番制の報告者のレポートを受けて質疑応答する読書会である。通例は武士階級のなかで行われ、四書五経がテキストとされた。寺子屋における往来物の斉唱暗誦と好一對をなす。「会読」は厳格な身分格式の社会にあつて、唯一の自由な言葉が飛び交う場であった。前田勉によれば『江戸の読書会』2018年、平凡社、「会読」には三つの原理があつたという。第1の原理は、参加者の討論を積極的に促す相互コミュニケーション性、第2は、討論においては身分階級の別なく対等でなければならぬという対等性、第3は、読書のみを目的とし、会則を定め、期日を定め、一定の場所で行うという結社性である。このような自由討論会が幕末の時代に広く普及し、やがては洋学や政治的な問題を議論する場になっていき、明治の自由民権運動の土壌になつたという。

私たちも学生時代には自主的な読書会を盛んに行い（多くは喫茶店を長時間占拠して行われた）、授業よりも情熱を傾けたものであつた。「会読」の精神を受け継いでいたのであろう。いまはそのような機運も大学から伝わってこず、まして新型コロナで逼塞し孤独化している若者たちは、いわば孤立無援の環境のなかで知的な人間関係の呼吸困難に苦しんでいるのではないか。

ていた人がいなくなる、笑い声が聞こえなくなる。そんな日々は二度とこないでほしいと願うばかりです。

大学に入学し、「笑顔」に惹かれて入った学生主体の団体があります。「僕らの夏休みProject」(<https://bokunatsu.com>)です。岩手県の沿岸地域の小学校に伺い、小学生と交流しています。子どもたちの将来の選択肢の幅を拡げたい、もっと夢や希望を持つてほしい。そんな思いを込めて、大学生300名以上で活動しています。今年度はオンラインという形で交流しましたが、またいつか直接会って、笑顔が絶えない空間を共に分かち合いたいと思います。

高校生の頃の出会いが、今に繋がっています。そしてこれからもその繋がりは自分の生きる上での軸として、ブレずに持ち続けたいと思います。改めて、生きていることと、今まで出会ってくださったすべての方に感謝したいです。

（上智大学・学生）



仙台一高での授業（2010年）



私はいま研究センターで二つの読書会に参加しているが、人文の波が潮引くような今日の状況のなかで、細々とはあるが、読書コミニケーションの燈火を灯し続けることは小さくない意味があると思っている。

(宮城教育大学名誉教授)

## つながる場であり続けて

山岸利次

「センターつうしん」の100号発行、まことにおめでとうございます。運営委員を務めさせていただいた者としてお祝い申し上げます。

みやぎ教育文化研究センターには大変お世話になりました。教育関係者と市民、そして研究者をつなぐ「広場(アゴラ)」としてのセンター。そして、その声を集め多くの方に届ける「センターつうしん」。センターでの会合で聞かせていただいた先生方や市民の方のお話は、研究者として何を考え、かつ、応答していくべきかを示していただいたものでした。また、その時その時の教育・子ども問題を的確に捉え問題を提起する「センターつうしん」は、大学の講義でも使用させていただきました。マスコミには、批評家のように第三者的に教育・子ども問題を語る言葉が溢れています。当事者として問題と正面からぶつかっている方々の言葉に多くの受講生たちが揺さぶられたようでした。

みやぎ教育文化研究センターのように、現場の先生方、市民の方々、そして研究者が日頃から交流し、かつ、いろんな企画を行う

センターは全国を見渡してもそうないのではないかと思います。これはひとえにセンターの運営に関わっている方々のご尽力の賜物だと思っておりますが、こうしたつながりをぜひ今後とも持ち続けていただければと思います。言うまでもないことですが、複雑化した教育・子ども問題に対応するには多くの方々の協働が不可欠です。そして、そうした協働を行うには、そのための基盤が必要です。日頃からつながっているからこそ、協働が可能となるのだと思います。センターとは、そうしたいろんな方がつながる場であり続けてほしいと思っております。

私自身もセンターをきっかけとしている方々となることができました。そして、大きく成長させていただきました。この9月に宮城を離れてしまいましたが、今後のセンターの繁栄を祈念しております。

(長崎大学)



毎月開かれる「教育」を読む会

# 視野を広げ、 実践を考え直す

大木 一彦

私の教員人生は、様々な形でみやぎ教育文化研究センターに支えられてきた。一番お世話になってきたのは、雑誌『教育』を読む会の活動を通してである。

大学時代の人間関係から全国編集委員にはなったものの、開店休業状態だった私にも、中森先生や清岡さんが声を掛けてくださった。『教育』を読む会が復活し、以降毎月開催し続けた。特に、宮教大に本田先生が赴任されて以来、多くの大学研究者の方が出席して下さるようになった。

毎回、全員で1〜2の記事を読み、感想などをフリーに語り合うのだが、そこで耳にする発言の一つ一つが、それぞれの専門分野の知識や豊富な読書量、そしてご自分の経験などに基づくもので、私にとっては新鮮で、自分の教育・学校・子どもの状況についての考えを深めるとても貴重な刺激となってきた。現役時代は日常の業務に追われ、雑誌を読まずに参加することも度々だったが、それでも得られる収穫は多かった。また、読む会を通してできた人間関係も私の貴重な財産となっている。

他にも、道徳の学習会や様々な座談会に参加したり、そしてセンター通信を読んだり原稿を

書かせていただいたことも、私の教員生活の支えとなってきた。

教員は、日常の業務に追われているとどうしても視野が限定されてしまう。例えば、「道徳の教科化」について、政界からの要請についての知識もなしに、現場で細かなことばかり頭を悩ませていることは、時代に流されているという点であり、忠君愛国の精神の注入に手を貸した戦前の教員の二の舞となってしまう。

その点、センターの活動に参加することは、自分の視野を広げ、自分の実践を考え直す一つの機会とすることができる。センターにとりより、宮城の教員に期待するのは、自分をすり減らしてばかりいないで、センターに足を運んで自分を磨いた上で、子どもの前に立つということである。

センターがあるのに活動に参加しないのは「玉の持ち腐れ」ですよ！  
(仙台市・館中)

## 学んだ！ 戦後教育の歴史と理論

遠藤利美

「その気になったから」……ヒトが二足歩行を始めた理由について問われ、ああでもないこうでもないと考えた挙げ句に大田堯先生から発せられた「答え」だった。一瞬あつげにとられ、

すぐに「なるほど」と合点した。

意志の力（思い立ったこと）が「2足歩行」の優位性に気づかせ、「その後の進化」につながったと理解した。みやぎ教育文化研究センターの門出の記念講演での思い出である。

中森先生と清岡さんを中心にみやぎ教育文化研究センターが発足すると知り、心躍る思いだったのを憶えている。というのは「これで宮城の教組運動や教育実践の理論的な柱ができる」と確信したからである。実際、発足後は中森先生の豊富な人脈を元に、全国教育界の重鎮や新進気鋭の研究者らが続々と宮城に足を運び、最新の理論や実践、情報を我々にもたらしてくれたことになった。

私は初任地が東京葛飾で、当時は区内外に三上満さん、尾木直樹さん、能重真作さんなど全国に名が知れた実践家がたくさんおり、学校の荒れを克服する学校づくり実践が花盛りであった。東京には「東京の民主教育を進める教育研究会（東京民研）」があり、都教組の運動や教育実践の理論的支柱となっていた。「多忙な現場ではなかなか手が回らない理論研究を行い現場に情報提供する組織がある東京はすごい」と感心させられていた。

1990年に宮城に転動した私は、宮城の教組運動の方針の確かさや力強さに大いに励まされる一方、県内の学校・学級づくりで頑張っている多くの仲間と出会い、学習と実践を重ねた。その間、中森先生の講演や講演記録を何度も何度も聴いて戦後教育の歴史や理論を学んだ。中森先生を知ることができたことは、宮教組の富

櫻先生との出会い同様、私に大きな影響を与えてくれた。

歴代の所長さんやスタッフの皆さんのこれまでのご尽力に感謝するとともに、センターの今後のますますの発展を祈念したい。

(仙台市・沖野中)

## 平和の追求を

### これからも

早坂 百合恵

「親育ては誰が担うのか?」「子どもの不安やストレスをどうするのか?」「教師の忙しさを何とかできないのか?」

大人にさえ先が読めないコロナ禍の中、子どもはなおさら不安やストレスを抱えていることを日々実感する。特に、学校生活における不安やストレスは、より大きい。私は、それが元になっていると思うのだが、子どもたちが些細なことでイライラした様子を見せる。トラブルも起きる。私は私で、管理職とのやり取りや、学習を進めることに追われてせかせかしている。そして、親に電話をかけて、ふと感じる。「親も悩んでいる」と…。

大学時代、「十五才学校Ⅳ」という山田洋次監督の映画をテーマに話し合う座談会と呼ばれ、研究センターを訪れた。高校時代の部活動終了後、心を閉ざし気味になり、かつ燃え尽き症候群のようになっていた私には、当時「学校」が

楽しいものではなかった。それは、学校が変わったのではなく、自分が変化した(させられた)からだだったと思う。座談会では、学校のことを「箱のような物」と話した記憶がある。小・中学校の頃は、色々なことがありながらも、学校が自分の居場所だったし、楽しかったはずなのに。「学校に来たくない。学校が楽しくないんだよ。」つい先日、子どもから聞いた言葉だ。「勉強が面倒くさい。」とも言っていた。「ああ、そう感じさせてしまったか…」と心が痛んだ。一方で、「よく言ってくれた」とも思った。「この子と向き合おう」と思った。

同じく大学時代に、中森孜郎先生から聞いた「戦後、教育は180度変わった」という言葉の重みが、自分の中で年々増している。「教育」の担う役割は非常に重要だ。恐ろしくもあるし、希望でもある。



私は、通勤時間以外、ほとんど子どもという。学級の子ども、そして、我が子。常に「子どもを中心に」「子どもと向き合って」というスタンスでいるが、さすがに時々息詰まる。我が子との距離や、かける言葉は難しい。そんなとき、話を聞いてくれる仲間や先輩がいることは、とても大きい。私にとって、センターや組合の存在は、学校Ⅳの主人公、大介が一人旅で出会う人々と似ているのか?とも思う。

冒頭の疑問に戻ると、これらに答えるべく率先して話題を提供し、議論の場を設けてくれるのがセンターの役割なのではないか、と思う。そして、中森孜郎先生のと時から大切にしてきた「平和」の追求を、今後もお願いしたい。学校教育は、「平和」にとって欠かせないものだと感じている。

(仙台市・吉成小)

## 「いいとこみつけ」

玉手 まなみ

一日の終わりに、「今日は自分のどんなところがよかった?」と聞かれたら、答えられるでしょうか?

今担任している6年生の子どもたちと一緒に、「いいとこみつけ」をしています。

朝の会で、無地のA5のノートをもとに4つに切った小さなノートが配られます。表紙の裏側には

クラスの誰かの名前のはんこが押してあります。

その日1日、こっそりその人を観察していいところを見つけます。誰のノートを自分が持っているかは、仲のいい友達にも内緒です。帰りの会で、いいところが書かれたノートが本人に渡されます。子どもたちのノートの中に、担任である私のノートも紛れています。

「何かやってもらったとき、必ずありがとうを忘れないところがいいと思います。」

「いつもみんなを笑わせていてすごくいいなあと思つてます！これからも続けてね。」

「算数のときに、分かりやすくみんなに説明をしていてすごいと思いました。」

「1時間目のとき、はつきりと発表していた。とても聞きやすかったよ。これからもがんばつてね。」

「けん玉をしていたときに、ほめてくれました。」

「鼓笛のときに、アコーディオンを一生懸命弾いてたよ。すてき〜！」

毎日誰かのいいところを見つけて、毎日誰かが自分のいいところを見つけてくれます。

一度やってみると、「先生、今日はやらないの？」「私がノートを配り忘れると、「先生、みつけノート配るの忘れてるよ！」

3時間授業の日にも、「今日もしようよ！」

こんな調子で、6月30日から毎日続いています。

学校での一日を振り返ると、必要なことを伝えたり、足りないことを指摘したり、ダメなことを注意したりするコミュニケーションにあふ

れています。子どもたちが求めているのは、もつとあたたかで、自分を肯定してくれるコミュニケーションセッションなのだ実感しています。

「さようなら」のあいさつの前のひととき、ノートを読みながら「ふふふつ」と、柔らかい表情になる子どもたちを見るのが、とても好きです。いいところみつけの実践に出会ったのは3年前に参加した学習会でした。

私の学級は、センターをはじめとした「学級でこんなことをしているよ。」と話すことができる交流の場に支えられています。

私もいつか、場所や時間を超えて誰かの学級を支えることができるよう、これからもセンターの活動に参加していきたいです。

(柴田町・東船岡小)

## 朝ドラの

### 旦那様のように

阿部 菜知子

「センター」といえば、仙台市教育センターよりもこちら「みやぎ教育文化研究センター」が頭に浮かぶ、そんな健全な教員となつて、はや25年が過ぎました。しよっぱなからの私事になりますが、昨年永年勤続となり、センターと歴史がほぼ同じという事実には喜びを感じております。

四半世紀のお付き合いというほどではありませんが、センターと自分の歩みを振り返ってみますと、きっかけは、かれこれ10年近く前になるでしょうか。仙教組女性部の夏休み企画「スイミー講座」です。女性部三役となつて企画を考える中で、多くの先生たちが参加できるようにと研究センターと共同の取り組みにすることで大いに助けていただきました。形だけでもなく、ある年にはアロマテラピの講座でセンターの場所をお借りして、アロマの素敵な香りで充満させたことも。当時の所長が入ってくるなり「うわ〜とひるんでいたのを思い出します。」

ここ何年かは、若い頃と自分が学びたいことが変わってきて、個人的に「こくご講座」などに顔を出しています。センターの講座では、どっぷり深く教材に浸れるのがたまりません。そこにあるのは「教科書で教える」面白さです。(立派な御託を並べる市教委の研修は面白いと思つたことはないけど)。自分が子どもになにを教えたいと思つているのか、学校を忘れて原点に返れる感じます。この感覚は、若いころにはわからなかったかもしれません。

自分の成長に合わせて、いつでも振り返りたいくれる、さながらまるでかつての朝ドラの旦那様ようですが、センターにはそんな存在であつてほしいものです。これからもいつもそこにあり、私たちの学びを支えてくれますように……。

(仙台市・北仙台小)

## 学びを保障する場として

宮澤 孝子

本学には、家庭科と美術の教員養成課程がある。カリキュラム上留意されたキャンパスの造りを見れば分かる通り、講義室よりも調理実習室や被服実習室、そして、アトリエ教室が講義棟面積のほとんどを占めている。つまり、現在、COVID-19対策として文科省が強力に推奨するオンライン授業というものは、本学の学生にとってほとんど意味をなさない。動画を見たところで、自分が手を動かさなければ、あるいはそこに仲間との協力がなければ、何もでき上がりはしないからだ。オンライン授業による「教育」とは一体何なのか。その「教育」によって、果たして「人間」は育つのだろうか。育てようとしているのは、「人間」ではなく「人材」になつてはいないだろうか。

音楽イベント等の芸術文化活動が自粛を要請されたことは記憶に新しい。おそらく、世間で要請されてきた「不要不急」なるものに該当するのが本学の領域だ。おしゃれな服装をすること、美味しいものを食べることに、美しい作品を創ることの楽しさや面白さを知っているからこそ、家庭科や美術の教師になりたいと思っている学生は多い。しかし、集団的な文化的創造的活動は、COVID-19の影響下において、あつという間に低い優先順位がつけられ、「自粛」や「不要不急」に分類されてしまった。この「不要不急」とは何か。誰にとつての「不要不急」なのだろうか。

「不要不急」が「人間」として生きるために必要なことだと、子どもや学生の方が大人よりもよく知っている。「人間」らしく生きることは、そう簡単に妨げられて良いものではない。COVID-19による影響は、「教育」とは、「学校」とはなにかという問いを、全ての大人に突きつけた。子どもは、そんな大人たちをよく見ている。「教育」や「学校」とは何かという問いに、大人がどのように答え、行動しているか。今、どれほどの大人が真正面から子どもたちに向き合っているか。私にとつてセンターは、子どもや学生と正面から向き合うことに良い緊張感をもたせてくれる場所となっている。ここには子どもから目を逸らさない大人しかいないからだ。これまでも、これからも、そうあり続けるだろうということを、100号という数字の重さが物語っているように思う。

(東北生活文化大学)

## 初心を忘るべからず

田中 武雄

「継続は力―初心忘れず。中森孜郎・センター代表運営委員(当時)は、『つうしん』No.78(2015.3・30)の「センター設立20周年に思う」をこう結んでいます。「20年経て、……問題は、センターの活動をさらに持続していくために、いかにして若い世代の方たちに参加を求めていくか、という点にあります。」

私も、宮城をはなれて10年が経ちました。この間、送っていたいた『つうしん』のバックナンバーを括りながら、なお「継続会員」としての自らの「初心」に思いが至るのでした。1990年9月、私が金沢大学から宮城教育大学に移った翌年に、「日本作文の会創立40周年記念会」が成蹊学園でもたれました。

その「記念の集い」に五十嵐顕さんが、「初心忘不、初心忘而」というメッセージを寄せられました。これを私は、最初の『講座・生活綴方』（百合出版、1963）の執筆者でもあった五十嵐さんの「民間教育運動」に対する「戒め」と受け取っていました。しかし今、当時の五十嵐さんの年代（後期高齢者）をこえた時点でふり返ってみると、また違った感慨が浮かんでくるのです。

周知のように、「初心を忘るべからず」は、世阿弥（1363?〜1443）が40歳前後に著した『風姿花伝』の一節です。ところが、最近、「民主教育研究所」（民研）の愛知の評議員である折出健二さんから、世阿弥が60歳をすぎて著した『花鏡』に、「老後の初心忘るべからず」という言葉があることを教えられました。

折出さんは、「70代の者に何ができるだろうか? ……どんなに小さなことでも、試み、発信し、行動することはそれ自体が『初心』である。」とべています。（『新型コロナウイルスと私たち―子ども・学校・教育・社会』その1、民研、2020・6）

そうなのです。今後、私も、『花鏡』に倣って、「老後の風体似合ふ事を習ふは、老後の初心也。…せぬならでは手立てなきほどの大事を老後にせんこと、初心にてはなしや。」と心得て、精進を重ねていきたいと念じています。

（宮城教育大学名誉教授）

## 貧困・格差・ ジェンダー問題と教育

富樫 昌良

「みやぎ教育文化研究センター」を結成したのは1994年2月です。当時は、中曽根内閣の「戦後政治総決算」路線のもとで、憲法や教育基本法を蹂躪した露骨な教育介入が強まり、学校現場に深刻

な困難をもたらしていました。結成された「センター」の設立趣意書には、「子どもたちの健やかな成長とたしかな自立、個性ゆたかな発達をたすけるため、最善の環境とゆきとどいた保護・教育を保障することは、大人や社会の大きな責任です」と謳い、その責任を果たすために、「憲法、教育基本法、子どもの権利条約の理念の実現をめざす協同の場として誠実な努力」をする意義を述べています。

いま、コロナ禍の中で、子どもたちや学校を取りまく新たな矛盾や困難が広がっています。学校一斉休校、自粛の広がりは、多くの家庭に想定外の矛盾を生み出しましたが、特に職を失った非正規やシングルで子育てをしている女性たち、働きながら大学に通っている学生・留学生、外国人労働者などにそのしわ寄せが大きく広がっています。

災害は不平等を拡大します。悪政はそれをさらに増幅させます。貧困や格差の拡大は、そのまま子どもたちの貧困に直結します。そして、多くの子どもたちの将来的・社会的地位の不平等やジェンダーの不平等をも拡大していきます。

この間、例えば2003年に東京都立七尾養護学校での「こころとからだの学習」に対する不当な攻撃が東京都教委や都議会においてなされました。2018年には東京医科大学での女子学生に対する入試差別問題が明らかになりましたが、まさにジェンダー不平等です。

日本国憲法では、どのような環境で育とうが、どのような進路を



参加者で会場いっぱいの設立総会（1994年）

たどろろが、どのような社会的地位にしようが、《すべて国民は個人として尊重され、生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利（憲法13条）が保障されていますし、《侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与えられている（憲法第11条）》普遍のものです。

創刊から100号まで、「センター通信」に貫かれている前述の理念を土台に、「貧困・格差・ジェンダー問題と教育」についてもさらに実践的検討がなされることを期待しています。

（宮教組・元委員長）

## 200号をめざして

出 浦 秀 隆

「創業は易く、守成は難し」の名句が私は大好きです。「みやぎ教育文化研究センター通信100号」と聞くと、研究センター創立と教育会館公益事業との統合にかかわった者として感無量のものがあります。おめでとございます。

「通信」の中身ではないが、二つの時期で忘れられない思い出を記します。

センター創設時、財政計画立案で苦慮した一つが事務局長の人選と待遇です。10年越しの議論あつての設立ですから宮教協5単組からの財政支援は多くは望めず、事務局員の見当がつかないと悩んでいた時、中森先生から「教免有」「宮城移住希望」の清岡さんの推薦を得て今日に至りました。センターが研究活動を持続し、「センター通信100号」に至ったのも、宮城と全国の期待に応えたいとの清岡氏の熱情を得たことにあります。ただ、当時提示した処遇を振り返ると恥ずかしい限りです。

「センター」が教育会館公益事業の一部門となる時、財政的事情は言うまでもないが、最も重視したのが、「名称の維持」と「事務局員は専任」でした。センターの「設立趣旨」を教育会館公益事業方針に位置付け、専門職員として清岡氏の雇用を維持する、これが教育会館が長期にわたって県民と会員から信頼されることになりました。私は民研が『全書国民教育』等を発刊した時期に教員になりました。「国民の立場に立って、国民のために、国民の考え方で、国民の手でなものにも掣肘されず、広く学者・文化人・教師・父母の協力のもとに教育研究を醸酵する」との民研の基本理念は私の支柱であり、「みやぎ教育文化研究センター」の最も重んじるころでした。幸い教育会館理事会が、この趣旨を理解し、名称も、清岡氏の専門職員としての処遇も受け入れていただいたこと感謝しております。

かつて全国各地に20以上つくられた民研が今どうなっているか知りません。『センター通信100号』を迎えるみやぎ教育文化研究センターを誇りとして、200号めざして活躍すること祈念しております。

（宮城高教組・元委員長）

## 相談センターから見える 宮城の教育課題

寺 沢 幹 緒

相談センターには年間1500件を超える相談がある中で、ある一つの事例を紹介して、今学校にはどんな問題があるのか考えてみたいと思います。

### 【事例】

不登校になってから保健室登校をしたが、2週間ほどイ



ヤがって行かなくなつた。今は、毎日学校には父が送って宿題を提出するために登校して、すぐ帰ってくる生活。スクールカウンセラーからは「学校にも問題があるが、他の子は通ってきている。①本人に弱さがある。家庭が安心できる場になっていない。夫婦の関係がぎくしゃくしていたり、愛着障害がある」と言われた。

小1の先生は声が大きくてビビらせて指導するタイプだった。②2年生の先生は場をコントロールしようという傾向が強く、学校スタンダードをきちんと守らせようとする先生だった。本人は③「皆と同じことをやらされるのがイヤだ」「授業がつまらない」と言っている。(小学生女子)

この事例を読んで、私は3つの大きな問題があると感じました。

### ① 不登校は「本人や家庭の原因がある」のか？

スクールカウンセラーは、「学校にも問題がある」と一応学校の責任を自覚しているかのような言い方をしていますが、それに続けて「他の子は通ってきている」と言つて、結局は不登校の原因は本人にあると決めつけているのです。このことは夫婦関係や「愛着障害」まで持ち出していることから分かります。「不登校の原因は本人と家庭にある」というのは、文部省の1983年の見解でした。しかし、文部省は1992年に「不登校はどの子にも起こりうる」として、1983年の見解を事実上転換しています。この例は、文科省自身がとつくに克服したはずの見方が、まだまだ現場では克服されていないことを示しています。

### ② 「学校スタンダード」とは？

ここ数年來、教研集会などで問題になっていきます。私たちの報告集第20号で宮教組委員長の渡辺孝之さんは次のように述べています。

「スタンダード」は、子どもたちにとって、「先生が変わるたびにルールが変わらないからいい。」といえる。教師にとつても、「毎年一からルールを教えなくてもいいので楽。」という声がある。集団で生活するのだから、一定のルールは必要だ。しかし、今、進められている「スタンダード」は、そこまで必要かと思うほど細かく、有無を言わせぬ強制力がある。

こうした手法は、長年の管理を主体とする教育の中で生み出されてきたものです。こうした教育の仕方を根本的に改めることが必要なのではないでしょうか。

### ③ 授業がつまらない？

学校生活の大半は授業時間で占められています。本来、勉強は知らなかったことがわかるようになったり、できなかったことができようになる「楽しいこと」のはずです。子どもたちが心から「楽しい」と思えるような授業づくりこそ求められているのではないのでしょうか。

相談センターでは、報告集などで、不登校の真の原因は「学校スタンダード」に象徴されるような「競争と管理の教育システム」にあると繰り返し訴えてきました。国連子どもの権利委員会が昨年(2019年1月)に出された勧告でも「ストレスの多い学校環境(過度に競争的なシステムを含む)から子どもを解放するための措置を強化すること」を日本政府に対して求めています。教育システムを変えることは簡単にできることではありませんが、現場の教職員の教育実践を通じてできることはありませんが、現場の教職員の文化研究センターがそうした実践のセンターとしてさらに充実・発展することを期待するものです。

(みやぎ教育相談センター) 所長

# ますます重要な

## 研究センターの役割

高橋 正行

学習指導要領をはじめ文部科学省等が出す教育政策の文書や提言は本当にわかりづらい。語彙や文章が難解なのではなく、「美しい表現」の中に隠された本当の意図を読み解くことの難しさである。提言文のほとんどは、どうでもいい文章であり、その中の数行に彼らの意図がある。日々の授業や学校生活に追われる教師にとって、そのような文章を注意深く読み解く時間も余裕もない。知らず知らずのうちに私たち教師や子どもたちは、彼らの意図通りの「世界」に引き込まれていく。

世界の若者たちが平和や民主主義、そして人權を蹂躪する為政者に対し立ち上がっている。しかし、この日本でそれを感じることはなかなか難しい。社会矛盾に立ち上がるのは若者の特性と思っていたが、決してそうではないようである。抵抗する力や正義、平和や民主主義を求める力を育てるのは教育の力にあるのかもしれない。

センター通信100号は感慨深い。研究センター発足当時を思い出す。現在のフォレストビルが建てられる前の教育会館の離れの一室からはじまった研究センター。新自由主義教育に対抗する教育政策を研究・提言する教育研究機関としての役割と期待を受けて発足した『みやぎ教育文化研究センター』である。全世界を覆う新型コロナ感染は新自由主義政

策の破たんを明らかにした。人間を無視した経済効率優先の社会政策、教育政策が残した負の遺産はあまりにも大きい。この状況を改善・変革することは決して容易ではない、だからこそ教育分野での研究センターへの期待は大きい。

今、高校教育と大学教育が岐路に立たされていると言われる。破綻したとはいえ、大学入試への民間の参入等、高校教育への民間あるいは経済産業省の介入はあからさまである。大学に対しては運営予算の減額の一方で、軍事研究予算の押し付けが執拗に行われている。

日本国憲法が制定され、この理想の実現のためにつくられた教育基本法(旧)、「教育は、不当な支配に服することなく」「人格の完成をめざし」と謳っている。研究センターの役割はますます重要になっている。

(宮城県高等学校・障害児学校教職員組合・委員長)

### 子どもに責任を負う

#### 「民間」教育の

#### センターとして

渡辺 孝之

夜郎先生です。宮城教育大学を退官した中森先生は、次の仕事場として研究センターを選ばれました。先生ほどの方であれば他の大学の任官もありえたのでしようが、私はさすがに中森先生と思いません。

中森先生は私の卒論の指導教官でしたが、卒業後もサークルや教研集会など様々な場面で学ばせていただきました。先生は、諸外国にはない「民間教育研究」の格別な意味についても教えてくださいました。時代は、中曽根首相直属の「教育臨調」が発足し、財界・国家権力に都合のよい「人づくり」の教育政策が検討される真つ最中。「民間」はそれに抗して、父母・国民の負託に依拠し子どもに直接責任を負う本物の教育を作っていくという流れだということです。中森先生ご自身、国家権力による教育の支配に徹底して抗する姿を見せてくれました。それは戦前、軍国少年として少年飛行兵となり特攻出撃目前で終戦を迎えた痛苦の反省に立ち、平和と民主主義を希求する先生の生き方に裏打ちされたものに他なりませんでした。

「沈黙する賢い善人とは対極にあるまつろわぬ民の末裔が目指す教育実践がどのようなものなのか、問い続けていきたい。」私が学ばせていただいたている学校体育研究同志会宮城支部の方針の一節です。「北方の民間」としての矜持があります。コロナ禍にあっても、研究センターには、各地で奮闘する教職員・父母・県民に対し、子どもに直接責任を負う本物の教育を目指す「民間」の原点を指し示し続けていただきたいと思います。

(宮城県教職員組合・委員長)

1994年2月19日、みやぎ教育文化研究センターが設立されました。婦人会館で行われた設立総会参加者は300名を超え大盛況でしたが、開所したセンターは前の教育会館の裏手の離れにひっそりとありました。その初代所長に就任されたのが中森

## 本気で、本音で、 喧々諤々と議論する

伊藤 慶

毎回、とても楽しみにしているセンター通信です。勉強になること、知っている先生の記事があることなど、理由はいくつもあります。そんなセンターに期待したいことは、「喧々諤々と議論する」ということです。

現在、教育を取り巻く情勢は、様々な理由によって厳しい状況にあると感じています。そこからくる弊害というものがたくさんあるように思います。本来、大切にすべきものが、日々の業務に埋没してしまっています。同僚性が大切だということは誰もが分かっているものの、パソコンと対面する日々が続きます。子どもと向き合う時間もとれず、本読みカードや宿題などに時間を割かれる現状もあります。日々流されていく中で、大切なものや大切にしたいものが見えなくなり、いつのまにか存在さえも忘れてしまっています。もしかすると、大切にしたいものは、じっくり話し合い、議論する中で見つけるものではないでしょうか、自分の中の最適解を探るには、やはり立ち止まって振り返って、他者との対話によって生まれてくるのではないかと最近思っています。そんな「他者」になるものがセンターだと感じています。本気で議論する、批判的に考える、本質を追い求める、そんなことを大切にしていたきたいと思います。

語弊があるかもしれませんが、現在は「良いところを見つけ、ほめる」ということが主流になっていると思います。ほめられることは嬉しいです。しかし、それに慣れてしまうことは危険もあるように感じています。「あの人には〇〇と言えば、ほめてもらえる」「□□のような取り組みをすることで認めてもらえる」といったような「ほめられる」ための実践になってしまおうということです。最近まで、私も認め合う学習会がよいと感じていました。逆に批判的に話し合う学習会に嫌悪することもありました。今では、実践者に真摯に応えるということは、「よいはよい。わるいは悪い」ということを「喧々諤々と議論する」ことなのではないかと考えています。本気で、本音で議論する場であり続けることを心から願っています。

(石巻市・広瀬小)



## ひろまる・たかまる・ ふかまる

春日辰夫

権力によって敷かれたレールをひたすら走らせ、それが子どもたちの幸せにつながるのが教育の仕事だなどと私は思わない。教師・教師集団の不断の努力とさまざまな闘い、子どもたちとの格闘なしに、子どもの世界を広げ、子どもの希望を膨らませることにはならないだろう。

かつて中学国語の授業検討会で、取り上げた教材「鼓くらべ」(山本周五郎作)について、Sさんが「オレには、この作品を読んでも鼓の音が聞こえてこない」と、この作品について疑義を述べた時のことを今でも忘れない。Sさんのような深い読みの力を持ち得ない私(たち)はどうすべきか、討論を聞きながら考えつづけた。

これからも引き続き仲間と集まりつづけるしかない、力のない者の集まりでも、仲間との話し合いから何かしら見つけ合うことを積み重ねることしかないというのが私のなかでの結論だった。

勝田守一さんが、かつて、東北民教研第5回秋田集会で、「教科研運動をどうすすめるか」について「ひろまること」「たかまること」「ふかまること」の3点をあげ、それぞれについての簡明な説明を加えている(紙数の関係で「説明」は略す)。

この65年前のことばでありながら今も胸に響く。「センターつうしん」のこれからもこの3点が大事

にされるといいなと思う。

教育・文化をより広くとらえて、教育関係者だけでなく多くの人で希望を語る場になることを通信に期待する。加えて、教師の力を高めるための場になることを願う。そして、教育に関わるゆえにこそ、一人ひとりの世界を広めふかめることもまた重要な仕事だと考える役割を通信はもちつづけてほしい。

そのためにも、広い世代の、しかも広い読者層に応え、つねに何かを起こす「つうしん」になりつづけることを期待する。

(研究センター元所長)

## さらなる前進・発展を

菅井 仁

「あらゆる繋縛からはなれ何ものにも捉われずしかも強い情熱を以て真理の探究に努力する」「教職員組合特にその文化部と相携えて始めてその機能を十分に発揮することができる」。これは19947年に発足した『宮城県教育研究所』の初代所長・千葉胤成(たぢな)が発足に際して述べた言葉です。しかしながら、この組織は19968年には、『宮城県教育研修センター』と名称も「研究」を「研修」に変え改組され、文部省(当時)の下請け機関と化してしまいました。

そのような中、宮城にも権力の束縛を受けない自由な教育研究所をつくろうと、1976年に県内の5つの教職員組合が声をかけあいました。

唯一、宮城県教職員組合の定期大会で承認が得られず実現できませんでした。それを聞き残念に思った元『宮城県教育研究所』の所員でもあった大村栄先生や宮崎典男先生と菊地新先生の3名が設立準備委員会を代表して呼びかけ、1977年に設立されたのが『すばる教育研究所』でした。しかし、この研究所を支えてきた多くの先達が次々と他界し、2001年には大村先生も亡くなり、2002年2月の機関誌『すばる』最終号をもって研究所を閉じることになりました。

一方、『すばる教育研究所』と並行しながら、最初の提案から16年を経た1991年、『教育研究所』設立の提案が宮城県教職員組合でも受け入れられたことから設立準備委員会が発足。92年93年と正式名称や規定案などの討議を重ね、1994年2月に現在の『みやぎ教育文化研究センター』がスタートし、27年目の活動を展開しているところで

林竹二(元宮教大学長)は、「学んだことの証は変わることである」と話されていました。それは「学ぶ」ことで新しい世界がみえ、新しい世界がみえてきた人間は、同じ所にとどまることができなくなるからでしょう。これは『みやぎ教育文化研究センター』にとってもいえることだと思います。幸いにも、今、センターには県内7つの大学から研究者も参加し、活動の交流を深めています。研究者と実践者である教員や保育士、そして市民が共同で「学ぶこと」で、新しい世界がみえてくると思います。学びながら、さらなる前進・発展を願って止みません。

(研究センター前所長)

## “人”と出会う “知”と出会う

広場として

須藤 道子

私がセンターと出会ったのは、子育てのさなか、PTAや社会学級の責任者という役回りもあり、自分の社会的関心が方向づけられていた時期であった。

設立間もないセンターは、志高い使命感や、長年の悲願を達成しての高揚した雰囲気満ちていた。

センター所長であり代表委員である中森先生は、センターが広く市民にひらかれた場所となることを強く希望されていた。だから、親の立場でこうした場につながった私たちの話す子どもたちの今や、学校でのあれこれに、それはそれは熱心に身を乗り出し、耳を傾けてくださっていた。

やがて、私たちは先生をチューターに、おそらくは、個人的になら手にすることもなかっただろう幾冊もの『読書会』を重ねた。何年もかけてルソーの『エミール』を読破し、勝田守一の『能力と発達と学習』などの世界に導いていただいた。子どもの権利条約についても詳しく学ぶことができた。これらは、その後もずっと教育運動にかかわっている私の「原点」である。また、その仲間との出会いは私にとって、かけがえない宝物である。『読書会』は現在かなりバージョンアップしてメ

ンバー構成も変わってはいるが、センターで月に一回持たれている「ゼミナル sirube」の前身ともいえるものだ。

家永教科書裁判について学んだ折は、家永先生の生き方の中に、主義主張というよりは、人間として、その良心に従えば譲れないものがあることを強く感じた。どれだけ、人としての良心に忠実に生きていくのか、そういう覚悟を持てるかどうか。いつどんな時も「良心に恥じないその時その時を生きよう」、そう考える出会いとなった。

“人”と出会う、“知”と出会う。センターが多様な価値観や主義主張が行きかう、「広場」としてあり続けることを願う。

(研究センター運営委員)



ゼミナル sirube 読書会 (2020年9月)



## 読書のすすめ(第1回) 春日 辰夫

自分の仕事のために読んだ本のなかからですので、みんな古い本になりますが、今でも薦めたいものをとりあげてみます。

### ○『もうひとつの教育』 村井実著 1984年 小学館

私は、決められたレールに沿って忠実に教えることを教師の仕事と思うことに危慎を感じつつきました。子どもを囲いこむのが教師の仕事ではなく、子どもの世界を広げることが教育ではないか。それゆえに教師は、この書名の「もうひとつの教育」をつねに考え探しつつなければならぬと思いました。

著者は「人間というものは、どんなに単純に、あるいは愚かにさえみえることがあっても、自分の世界を外から閉ざされて、それですまされるなごいことには、ほんとうはできないものなのです。一応は閉ざされることを受け入れても、なんとかそこを超え出ることを同時に求めないではおれないものなのです。これが人間なのです。」と書いています。子どもも例外ではないでしょう。この書は「世界への旅」の副題がついていて、私は在職中、同僚6〜7人と、この本をテキストに読書会をもち話し合ったことは、今も残る思い出です。

### ○『世界を、こんなふうに見てごらん』 日高敏隆著 2010年 集英社

第1章は『なぜ』をあたため続けよう、第2章は「人間、この変わりたいきもの」……。「うつつ」で尊名に惹かれて読んだ本。「…人間は論理が通れば正しいと考えるほどバカであるという、そのことを知っていることが大事だと思う。それをカバするには、自分の中に複数の視点を持つこと」を著者は言っています。教育という仕事を営む人の教師にとって子どもの世界が広がっていくことは何よりです。

著者は滋賀県立大学長だった方ですが、「ぼくは」としての学校」という著書の書き出しには、「ぼくは、今でいう不登校児、というか登校拒否児だった。…学校と親の両方から責められて、完全な登校拒否、人間拒否になってしまった。」なのです。

※こわりの本はセンターにあります。お読みになりたい方には貸し出します。



おすすめ BOOK

# 「全国学力テスト」を

## やめさせたい

高橋達郎

退職前の学校でのできごと。7月、児童会主催で「七夕まつり」が体育館で行われた。体育館には子どもたちの願い事がかかれた七夕飾り。七夕の歌、七夕の由来の話、「七夕のおねがい」の発表。1年生から順に「泳げるようになりたい」とか様々な願いごとが発表された。最後に6年生代表の願い事の発表……私は愕然とした。その子はこう言ったのだ。「全国学力テストでクラス平均で全国平均を上回りたい。」

子どもが本当にこんな願いごとを言うのか。「七夕の願い」で子どもにこんなことを言わせる教育でいいのか。その学級は、学習の苦手な子が多くいた。そして、10月全国学力テストの結果は、全国平均を大きく下回っていた……。子どもたちはどんな思いだったろうか。

あろうことか、宮城県教委はそれまで載せていなかった結果の速報に2年前から、全国順位を「参考」として載せたのだ！文科省でさえ否定している平均値の順位！かくして、自治体も学校も教師も「学力テスト」対策に迫られ、教育が歪められている。

さらに、私が全国調査で毎年確認し問題と感じていることがある。それは、児童生徒の質問紙調査「自分にはよいところがある」「はい」と回答した宮城の小学6年生の割合は、ここ数年70〜80%、中学3

年生は60〜70%。全国平均を下回っている。つまり、自分によいところがないと思っている子どもは、小学生で4人に一人、中学生で3人に一人となっている。自分の良さを感じられない子どもたち。こちらの方が大きな問題ではないか！

平均点からみれば、半数の自治体。半数の学校。半数の学級。半数の子どもたちは、平均点以下と判定される。学力テストは多くの自治体ごとにも行われるようになった。そのたびに傷つけられている子どもたち。テストで「いい子」も優越感や人間観の形成に悪影響を及ぼしているのではないか。これは、教育の目標「人格の完成をめざす」ことに反する。「どうせ、私はバカだから」と子どもに言わせていいのか。ここからは、権利意識も平等要求も生まれえないだろう。

私が、この研究センターの仕事を引き受けた理由の一つが、宮城における学力テストの弊害を具体的に明らかにし、それらをやめさせること。皆さんのお力をお借りしたい。

(研究センター所長)

## 3つのイメージ

清岡修

研究センターの仕事は多種多様、なんでもありだ。子どもの視点から教育と子育てを問い、いま何が問題となり課題なのか。ああでもない、こうでもないと考えながら取り組みを考え、試行錯誤

しながら歩んできた。その中で、変わらず持ち続けてきたイメージ（ことば）がある。

一つは、谷川俊太郎の戯曲「部屋」の冒頭。それは、次のような男女二人の対話から始まる。

男 君は誰？

女 誰でもないわ、まだ。

男 ここはどこ？

女 どこでもないわ、また。

男 では何をしているんだ、君はここで。

女 何もしていないわ、まだ。

二人の会話は、戯曲の始まりであるとともに、女の「まだ」が、これから二人の世界そのものの始まりを示唆し予感させる。ここから「始まる」、何かが「うまれる」、それも一人ではなく異質者との対話と共同の中で。そのようなひとつのイメージ。

二つ目は、学生時代、ある研究室のドアに掲げられていたことは「歩みいる者に安らぎを、去りゆく者に幸せを」。研究センターを訪れる人にとって、ここがほっと安心できる場として、また学びや語らいを通じて自己を取り戻せる場としてあるように。そのようなひとつのイメージ。

三つ目は、大岡信の「純粹」について語る次のことば。純粹とは「抵抗を排除してゆくところに生み出されるものではなく、逆に抵抗するものすべてをつかみとり、おのが組織体の一部と化さしめるところにこそ生み出されるものなのだ」。不純物のない純粹さではなく、異質で雑多な夾雑物をも取り込むことを通じて生み出される純粹さ。そういう強度と深度を持った純粹のイメージ。

これが、研究センターをめぐる3つのイメージ。それは私のひとつの想い、そして願い。このような場であること、こういう人と人との出会いと創造の場をつくることに、微力ながらこれからも努力していきたい。

(研究センター所員)

## これからの

# センターの課題と展望

数見 隆生

## 初心にかえって

創設から26年(四半世紀)が経過しました。センターの設立趣意書には「子どもたちの健やかな成長と個性豊かな発達を願って」立ち上げたことが明記されています。そしてその実現のためには、日本国憲法、教育基本法、子どもの権利条約の理念を活かす立場に立つて活動する決意が述べられています。

しかしながら、この26年間の子どもたちの現実の推移を見ると、宮城県下においても子どもたちの成長・発達上の課題は一層深刻さを増してきたように思われます。不登校児童生徒の割合は全国のワーストの状況が続いていますし、いじめによる深刻な自死問題はここ数年連続して発生しました。また東日本大震災では学校管理下における多数の死亡事故が生まれました、今回のコロナ禍においては、本県でも生命に関わる感染症危機と一斉休校による

発達の阻害状況が大きな問題になっています。

学校という場において生命や発達に直接繋がる問題が生じているにもかかわらず、近年の学校運営では、教育の基本にこうした課題が位置づけられず、本センターの願いに沿わない「反教育」的状況が進行しています。その背景には、安倍政権下において教育基本法の理念が踏みにじられ(2006年)、強引な教育政策により学校教育が国家の「人材」育成機関と化し、「学力テスト」体制による競争や学習指導要領での「資質・能力」目標による格差づけの場が一層変質してきた状況があります。

本センターでは、こうした問題を機会ある毎に問題提起する企画や取り組みを行ってきましたが、大局的な状況や動きは余りにも大きく重く、子どもたちの課題は山積しているといわざるを得ません。この期に、今一度初心に帰った取り組みが必要かと思えます。

## センターは今後何をなすべきか

この3月、中国に端を発したコロナ問題は急速日本にもやってきて、いち早く学校が一斉休校となり、全国のほとんどの学校が丸々3ヶ月間閉鎖する事態となりました。今もそのコロナ禍は収束の気配は見えませんが、ポスト・コロナ禍の世界は共存の世界に向かつていくのか、分裂・分断と自国主義が一層深まるのか、そしてまた教育界がその世相と関わって自分主義の競争原理が一層支配するのか、人間らしい共生と発達の論理に方向転換させるのかの瀬戸際にあると思われます。教育の再生のためには、クラスの数減や教員の増員、子どもが人間として成長・発達し得るカリキュラム内容の精選や教員の主体的な教材づくり・授業創造の保障、子どもたちが

余裕を持ち夢中になれる教科外活動や学校行事等の創出等、各学校の自主的な学校づくりの実践の創造活動が不可欠でしょう。

本センターは、そうした各学校・教員の実践創造を支援し、共同し得る運営と活動を行いたいし、同時に、そのために多くの県民や市民、児童生徒の保護者を含めた人々と共同しうる存在でありたいと考えます。本センターを「みやぎ教育文化研究センター」と命名したのは、地名としての「宮城」ではなく、この県内に住むすべての人々の思いと共感に根ざす教育・文化の進展に寄与したいとの願いが含められていると考えます。

また、本センターは、単なる一民間組織というのではなく、県民の「教育会館」の中に位置づけられている組織として運営・機能し、教育・文化に寄与する「研究」センターとしての実質を担える機関としても発展させていければと考えています。

(研究センター代表運営委員会)





おすすめ映画

# 「名もなき生涯」

監督・脚本/テレンス・マリック  
2019年/アメリカ・ドイツ  
日本公開/2020年2月

戦争と人間を描く作品。舞台はドイツ国境に近いオーストリアの山岳農村。1939年から43年。若い農民夫婦の草刈りの音で始まるが、絶えず圧倒される美しい山岳と谷間の農村風景がこの地で起きたことを見守る。渓谷のの流れは絶えない。

ドイツに併合されたオーストリアではナチスドイツへの忠誠が求められ、戦争への動員が村にも押し寄せる。軍事訓練に参加した農民フランツは、ナチスの宣伝映像に違和感を持つ。「僕らの国にいったい何が?」牧師へ問う、「無実の人たちを殺している。他国を攻撃し、弱者を食いものに……」、「指導者が悪魔なら、国民はどうしたら……?」。フランツは司教にも会いに行くが、「祖国への義務を果たすことが教会の教え」と、教会はナチスの協力者となった。フランツに従軍命令が来るところからドラマが展開する。ナチスに染まっ

ていく村人たち、その中でフランツは兵役拒否を決断する。「ヒトラーに忠誠など誓えない。無理だ」と。戦争は人を殺すことだと。「自分の民族や国を否定するのか、売国奴め!」、村人からの攻撃。ナチスはフランツを収容所に送り、ドイツ帝国の裁判にかける。「お前の抵抗で何か変わるとでも?」、「信念に反することはできません」。映画は、収容所のフランツと農村で生き抜く妻フア二との手紙のやりとりを中心に進む。苛酷な収容所のフランツと、フア二の農作業の日々、観客を包み込む美しい光と映像が交差する。この時代を二人は一緒に生き、美しい自然に囲まれている。フア二は三人の子どもを抱え、生まれた時から暮らす村で、酷い仕打ちを受ける覚悟をする。自分たちだけで農地を耕し、農地を守った女性たち。フア二は姉と互いに支



# 名もなき生涯

え合いながら生きる。最後に面会する二人、朗読される手紙……。その日、村人は教会の鐘を鳴らし、フランツの死に農地で祈る。映画は最後にジョージ・エリオットの一つの詩を記す。歴史に残らない行いと希望を語るものだ。

(長住 康博)

# センターの動き

〔6月〕  
15日 つうしん99号を東北大職組、宮教大職組に届ける

16日 中森先生の自宅へ面会に行く  
22日 つうしん100号内容検討  
26日 第4回事務局会議99号の反響・100号内容検討  
27日 『教育(6月号)』を読む会再開(9名参加)

29日 ゼミナールStudy再開、「テューイ教育論②」(12名参加)  
30日 「こくご講座」開催の検討

〔7月〕  
4日 延期していた「震災のつどい」中止  
6日 「こくご講座」内容の検討  
10日 第5回事務局会議、100号執筆者依頼決定

11日 第2回研究部、コロナアンケート結果検討  
18日 『教育(7月号)』を読む会(9名参加)  
20日 ゼミナールStudy「テューイ教育論③」(11名参加)

〔8月〕  
3日 100号中森インタビュー  
4日 「こくご講座」チラシ完成  
8日 第3回研究部、アンケート分析担当  
28日 第7回事務局会議  
29日 第4回研究部、アンケートのまとめ方の検討

〔9月〕  
1日 「こくご講座」進行の打合せ  
5日 「2020こくご講座」(26名参加)  
10日 山形孝夫先生来局、献本  
12日 『教育(8月・9月号)』を読む会(9名参加) 第5回研究部、中間まとめ、次のアンケート案検討

14日 ゼミナールStudy「テューイ教育論④」(10名参加)  
15日 100号校正・構成再検討

# 編集後記

この間、東北工大教授でもあった工業デザイナー秋岡芳夫の著作を収集し読んでいた。今年は1920年生まれの秋岡芳夫・生誕100年にあたる。秋岡芳夫は、消費社会に疑問を持ち「立ち止まった工業デザイナー」として「消費者をやめ愛用者になろう!」と呼びかけた。岩手の大野村、北海道の置戸町など全国を駆け回り、地域の産業再生に取り組んだ。

その秋岡が雑誌「美術手帳」1966年4月号「特集おもちゃ」に「子供のための大人たち」と題する文章を書いていた。「戦争が東京に残してくれたのは、うその様に澄み切った青空だけだった。うそして夢想した。初山滋のような絵描きになろう。オモチャを作る人になろう。子供達に関係のある仕事に取組むことで、戦争のいまわしい想出からも抜け出せるような気もしたし、子供・童話・絵本・玩具などという言葉を口にする事、もうそれだけで充分平和で平等で自由で未来が明るいような気がした」。空襲で自宅を焼かれた秋岡は、戦後「子供のための大人たち」になろうとした。

そして私は思った。「子供のための大人たち」がこの「つうしん」を100号まで支えてきたのだと。コロナ禍の100号には33名の方に寄稿していただいた。深く感謝いたします。皆さんからいただいた言葉を受け止め、「子供のための大人たち」として、これからも歩み続けていこうと思ふ。(達)



センターHP QRコード